

今どうしようかなあと迷っている
あなたに参考になればいいけど2

ねこよう

序章

暗闇の中、ベッドの上で目が開いた。

壁にかかった時計盤を見ると、あと少しで四時に向かっている。

アレ？てことは・・・明け方の四時か。そうか・・・とまた目を閉じようとして、気がついた。

あ、バイト！

慌てて上半身を起こし、「フザケンなよ！」と誰に言うでもなく吐き捨てる。一番フザケていたのは、寝坊した自分なだけだ。

ふと、部屋の闇の中に、目が留まった。

なんだか、闇が薄い感じが――。厚いカーテンの隙間からは細い光が漏れており、自分の部屋の本棚や机がどうにか見えている。明け方の四時だったら、もっと闇は濃くて、空気が沈んでいる。

夕方の四時だ。「鳥よし」で深夜零時から働いて、「お疲れ様つす」と店を出てきたのが午後一時。それから家に帰って、昼の十二時半くらいにベッドに入ったのを覚えている。だから、まだ三時間くらいしか眠っていない事になる。

大きく息を吸って、溜息だかなんだか分からないものを吐き出した。

今日は、夕方からのいて座の稽古は無い日だから、夜の十時くらいまでは眠っていられるって事だ。

ほっとした脳を枕に落とし、毛布をたぐりよせた。

いっただか店に来ていた客同士が喋っていた声が、不意に蘇ってきた。

「俺たちはさ、夜行性の動物みたいなもんなんだよな。太陽出たら寝て、陽が落ちたら動き出すやつだよ。」

夜行性の動物だとすると、自分は何になるんだろう。

コウモリ？ フクロウ？ ネコ？ それと・・・あと・・・なんだっけ？ 夜行性

の動物って・・・カブトムシ？は虫だし・・・キツネ？ ネズミ？ うーん・・・

陽が傾いていく薄い闇の中、視界が狭くなっていき、もう一度真っ暗な世界に墮ちていった――。

秋だ。焼き鳥の焼き場で汗をダラダラ垂らすのからやっとな解放されたが、半袖Tシャツでは涼しすぎ、長袖Tシャツでは暑くなり、結局長袖の袖をめくって過ごすような日々である。僕の働いている焼き鳥屋では、相も変わらず飲み屋のお姉ちゃんやカジノバーで働くディーラーや、ヤクザや居酒屋店長やホストまで、いろんな人が飲みに来ては酔っぱらっていた。

劇団いて座の次回公演である「きれいな口紅」のための稽古が始まっている。今回、キャストイングの発表が行われ、僕こと奥村陽平の名前が、キャストイング表にあった。やる役は、主人公の船井さんの家に出前を持ってくる寿司屋だ。少しだが、セリフもある。それよりも今回の芝居は、場面の転換が多く、現在と過去の戦争中の時代を行き来したりもするので、そこをどうやって場面の転換していくのか、どういう装置にしていくなが最大の問題だった。

その日、いつものようにいて座の稽古場に行くと、いつものようにムスツとした顔の田丸さんの隣に、もつとムスツとしたおじさんが座っている。誰だあの人？田丸さんと話している所を見ると、見学者とかではなさそうだ。稽古が始まる前に田丸さんが、

「まあ、最近入ったヤツは知らないと思うが、今回の装置は笠野にやってもらうことになったから。」

「よろしく」

と、その人はびっくりするくらい謙虚さの無いよろしくを投げた。メガネをかけたガマガエルみたいな顔に後ろに流した長髪。やや猫背の姿勢。なんなんだこのおっさん？

稽古が終わると、増井さんと駒込さんと松岡さんが笠野さんの周りに集まって話している。そっちに聞こえないように菊池さんに、誰なんスカあれ？と聞いてみた。

「あれって笠野さん？ バカあんたすげえ人なんだヨ。昔から装置とか照明とかやっていて、増井さんにも色々装置の事とか教えてきたんだから。バカだね」

そんなにポンポンとバカバカ言わなくてもいいじゃないかと思いつながら「じゃあ、怖い人なんですか？」と気になる質問を試みる。

「怖いに決まっているじゃん。何かあったらすぐ怒るよ。前に笠野さんが装置やった時にさ、アタシ女なのにボロっボロに言われたよ。」

「だったら、気を付けないといけないッスね。」

「何？ アンタなんかあつという間に怒られるに決まっているじゃん。アタシでさえ怒られるんだから。大丈夫よお、怒られたらお姉さんが慰めてあげるから。」

ハハハと乾いた笑いで返しながら、どこがお姉さんなんだよ水牛女が！と心の中でのしっぺおいた。

公演の稽古が開始された最初は、机を並べて脚本を見ながらの読み合わせ稽古からだ。ここで、セリフを声に出して読むということに集中しながら、自分の中のイメージを固めていく。もちろん、演出からのダメ出しも出る。ただ演出も出演者がどのくらいセリフを読めるのか？というのを探っていく段階なので、あまり厳しいダメは出ない。はずだったのだが・・・

「こんにちは。お待たせしましたー、花ずしですー」と出前を持ってきた僕こと寿司屋が第一声を読むと、「だから力を抜いて言ってみろって」と田丸さんが反応する。

じゃあって力を抜いて読んでみると、「今度は元気が無くなっちゃってしょぼくれた寿司屋さんになっちゃってんだよな」と言われる。

エー？ 元気があって事は声に力があるって事だよな。その力を抜いたら元気がなくなる。力を抜いて元気だけ出せってどうするの？ と禅問答みたいな所に早くも入りだしてしまっていた。とは言うものの、もうサ、一度舞台で役者として立ったんだよオレ、という全く根拠のない自信のようなものが産まれてきてもいた。「舞台上立つ」ってことは恐ろしい事なんじゃないかと思う。役者として演じてみて、大きな批判などを浴びなければ「アレ？ 自分ってかなりイケてるの？」なんて勘違いしてしまう。本当の批判は自分には絶対に聞こえない所で囁かれているのに――。

そんなわけで、ああオレには座って本読みなんて性に合わないぜ、やっぱり立って動いて役を作っていくタイプなんだ。早くこいこい立ち稽古♪とお気楽に考えていた。

装置作りに決まっていた土曜日。天気はびっくりするくらいに真っ青な気持ちのいい空だった。笠野さんは朝一番に作業場となった稽古場に来ていて、ムスツとした顔で座っている。ブルーシートを全面に敷き終えると、図面を見ながら笠野さんが最初の指示を出してきた。

「じゃあ、この小割を1810で4本切ってください。」

アラ？ 予想外な穏やかな声だった。こういう人は最初が肝心だと分かっている。店に来る気難しそうなおっさん達も、最初のコンタクトで「よろしくお願いします」と謙虚に出れば、可愛がってくれ・・・はしないけど、「マアいてもいいよ」くらいの許容は見せてくれるものだ。と僕は「ハイ」と答えてメジャーで小割を計って鉛筆で印をつけ、のこぎりを握ってギョギョと切り落とした。

切り落とした小割を「出来ました」と笠野さんに提出する。笠野さんは切り口を見た後で、その四本をトントンと揃えて並べてみる。

「これ、どのくらいで切ったの？」

「はい？」

「これ、どのくらいの寸法で切ったんだっけ？」

「せ、1810ですけど・・・」ひよつとしてこの人、自分が言った寸法忘れちゃったのか？

「これ見てみな」

と、揃えた小割を見ると、4本の切り口が2ミリくらい段々になっている。

「奥村、オマエ鉛筆で線引いた所の上から切ったろ？」と横から増井さんが口を出してきた。線を引いて上から切る。当たり前じゃんか、と思いつつ「そうっす」と言う。

「ノコの歯の厚みがあるだろ？ その分考えてちょつと線の外から切らないと。」

それにこれって切り口が曲がってるぞ。上に線一本引くんじゃなくて、横にも線引いて切るんだよ。」

増井さんに注意されて「ハア」と言う僕を覗ながら、

「小割切るのでこれじゃ先が思いやられるな。」と笠野さんがボソツと言った。

小割は2×3cmの四角の細い材料で、一番切りやすいものだ。それさえ満足に切れないのか、と言われてしまったのだ。ファーストコンタクト、失敗。である。

最初の「予想外の穏やかな声」はどこに行っただのか、この日、僕は怒られまくった。

釘を打てば「材と材がずれてるぞ」カッターでベニヤ板を切れば「曲がっているぞ」のこぎりなんかは何度切っても切り口が曲がりすぎて、終いには「お前はのこぎり持つな。材料がもったいなえ」と言われてしまった。人間こんなに怒られると、気を使うとか使わないとかなんだかよく分からなくなる。昼の休憩に近所の中華屋にみんなで行ったが、全員で食べようと注文した餃子の大皿に最後の一つが残った。笠野さんが取ろうとした所をサツと僕の箸がかっさらったので「お前餃子取んな！常識ないぞお前！」と怒られた。

餃子と常識は関係、無い。

こんだけ文句言うのだからあんたはちゃんとやるんだろ？と笠野さんがのこぎりや

ナグリを使う所をバレないようにチラチラ見ていたが、悔しいけど上手い。小割なんかは4本まとめて切つてきちんと揃っているし、釘の打ち込みも何でこんなスルスル入っているのかと思うくらいだ。こんなおっさんで、力も体力も若い僕の方があるのに、その差を補う、と言うか逆に大差を付けるくらい技術がある。

そして、今作っている所がどのどのへんなのか、僕にはさっぱり分からなかった。笠野さんも「これをこうしてくれ」「これを切ってくれ」と言うだけで、装置図面に関する事は増井さんとはボソボソ話しているけど、下っ端には話さない。「じゃあそう言う事でお願います」つてなつて、増井さんから切るとか打つとかの指示が出る。そんな流れが繰り返されていって、何がどこまで出来たのかも分からないまま最初の装置作成の土日が終わった。

「あらお兄さん。いい男じゃないの?」

いやー、そんなこと無いです。と答えると、「このお兄さんアタシのタイプなのよ」と、隣にいる連れの男に言っている。言われたお客は面白くなさそう。そりゃそう。店が終わって飲みに来た居酒屋の兄ちゃんに、自分が目当てのコが色目使ってるんだから。

「ネエお兄さん。今度うちにも飲みに来てヨ」

「すいません。この店があるんで、飲みに行けないスよ。」

「ここ何時からなの?」

「0時からです。」

「じゃあ早い時間で来て帰れば大丈夫じゃあん。ネエ」

「はあ・・・すいません」

モテる男はつらい。相手は女性じゃないけど。カウンターに座っているのは、ゲイバーで働くお姉さんとお客さんである。僕は愛想が無いのでスナックやパブの水商売のお姉さん方には全然モテない。「いい男じゃないの」とは商売トークで言われるが、そこまです。その代わりなぜかゲイのお姉さん達にはモテまくり、こういうふうに近い寄られる事が日常茶飯事なのだ。あまりにもモテるので、ある日、親しくなったゲイの姉さんの美鈴さんに

「なんでこんなにそっち系の人にモテるんスカね?」と聞いたら、

「アンタおんなじ匂いにするもの」と、低い声で言われてしまった。

深夜の三時なのに、店は満席だ。二つある座敷席の一つをヤクザの二人が、もう一つを飲み屋の店長と女の子達が占めている。カウンターには、さっきのゲイバーのお姉さんと客。ボーイズバーの男と女性客。居酒屋の若い男達。なんかが座っている。

とりあえず、最初に注文受けた焼き鳥や刺身や炒め物なんかは出し切ったので、後は飲み物か追加の食べ物注文を待つしかない。ホッとラークマイルドに火を点ける。

「なんでかなあ・・・」

と自然に声に出た。今回の寿司屋の出前持ち、「お待たせしました」とか「六千二百円です」とかつてセリフは、この店でも自分が当たり前に使っている言葉に近い。と言うかほとんど職場用語だ。なのに、ダメ出しの嵐。キャスティング表を見た時は、「焼き鳥屋やつてる俺だからこの配役をとれたんだ!」と、この仕事に就いてたことに感謝するくらいだったのに、今は「仕事に近い役すら出来ないなんて、何なら出来るんだ?」と自信をなくす要因になってきている。

「セリフを言おう言おうと考えすぎちゃうと、力が入って力んじゃうんだよ。だから

ねえ、お前さんは早く、力は抜けてるけどお客さんには届くつてやり方を出来るよ
うにならないといけないんだよ。」

と、田丸さんに言われた。そう言えば、田丸さんが演出している時はいつも目を瞑っているのはなんでなんだろうと疑問に思っていたが、「動きを見ていなくても、セリフを聞いていれば大体動きは分かるんだ。それで、セリフを聞いていて言い方がおかしいと思つたら、動きもおかしいんだ。」と田丸さんが言っていた。と吉田さんが飲みの席で教えて

くれた。

「それ聞いてさ、僕も、田丸さんみたいに、稽古の時に目を瞑って他の役者のセリフを聞いていたら、アレ？って思った所で目を開けると、やっぱりその人がおかしい動きしているんだよ。それで、ああやっぱりその通りなんだなって思ったよ。」

なるほど。でも、力を抜けたかイイ声を出すとか言われてもどうすればそうなるのか分からないんですね。と聞いてみたら、

「うん。どうすれば力が抜けていい声が出るか・・・それは知ってる人がいたら僕だって聞いてみたいよねえ。」と吉田さんはニコニコしてなんだか出来上がった顔になってきている。酔ったな。こうなるともうダメだ。

それにしても、ついこないだは歩きがダメだ出来ないだの言われて困ってたのに、今度はセリフだ。しかも、セリフの事ばかり考えてしまうと、「またあんたの癖の猫背が歩いてる時に出てきてるぞ」と注意されてしまう。

ああいつになったら俺の演技は絶賛される？とため息交じりに煙をフーと吐いたら、それを見ていたさっきのゲイのお姉さんが

「お兄さん悩みあるの？ なになに？ 言いなさいよ。アタシが聞いてあげるわヨ。アタシの部屋でゆっくり。」

と冗談交じりでいじってきたのを、だいじよぶです。といなしておいた。

主役の船井さんは気合が入っている。いつも僕が稽古場に行くと、早目に来た船井さんが身体を動かしている。

今回の芝居のラストで、船井さん演じる主人公は、自分がほのかに思いを寄せている男性が戦地に行ってしまう。船井さんは親友の女性と一緒に、駅に彼を見送りに来た。が、人ごみで彼に近づけない。彼女は惹かれ合っている親友の女性と彼が、最後の挨拶が出来るように、涙をこらえて親友を肩車するーというシーンがあるのだ。

その相手役の女性は、小柄だと言っても、船井さんよりは少し背も体重もありそうだし、しかし、ここで肩車が出来ないとどうしても話が締まらない。今の時点では、肩車でやるところまで乗っている女性の足が浮くがそこまで、船井さんが膝を伸ばして腰を起こすところまでいってない。だから本番ではしっかりと肩車で持ち上げられるように、スクワットや腹筋運動をやって、鍛えているのだ。その姿を見ると、

「おお。なんかここにきてやっと思ってる人を見たな。」

と僕は感じた。だいたい、この劇団は稽古終わりにも「こないだあの店に飲み行って」とか「職場の上司が・・・」とか「現場が納期ギリギリで」とかそんなサラリーマンみたいな話しばっかりだ。まあ普通に働いている人がやってくるアマチュア劇団だから当たり前なのだが。そんなじゃなくて、役者つてもつとストイックで、いつ身体を見られてもきれいなように身体を日々鍛えているとかテレビの役者を追ったドキュメンタリーで見たような気がする。

「奥村君おはよう。いつも早いねえ。」

と、夕方の稽古場に早く来る僕に、スクワットしながら船井さんは挨拶してくる。まあ僕は仕事が終わって遅れるという事は無く、昼に寝て夕方に起きて稽古に来てるから、寝坊しない限り遅刻しないのだけだ。

僕も、とりあえず身体を軽く動かして「あ・い・う・え」と声を出してみる。すると、銅像みたいに自分の席に座っていた田丸さんが「まだ喉から声出してるんだよなあ」とぼやくのが最近の稽古前のパターンだった。

「奥村。これ、自分のお店のなあ？」と、僕が着た衣装の紺色白衣を触りながら、高いのんびりした声で水木さんが聞いてきた。

「ハイ。店で使ってたなかった白衣です。マスターに芝居で使わせてくださいって借りてきました。」

「へー・・・似合うねえ。」

「そりゃあ、仕事着ですから」

「そうだよな、いつも仕事で着てるのと同じなものな。俺達の背広みたいなもんか。」

「そうですか、ね・・・」

いまいち分らない例え。水木さん、メガネかけて痩せた感じで飄々としていて、なんだか掴み所のない人だ。今回、舞台監督は増井さんがやって、舞台監督第一助手として増井さんの下についている。もう劇団入って十年選手なのだが、「水木い！お前なにやってんだ」と増井さんによく怒られている。でも別にそれがショックだとか悔しいとかそんな姿は全く見せずに、また同じような事で怒られる。

「水木は、よくわからん。」

とは増井さんの言葉だ。今も、僕との会話の何が満足したのか分からないが頷きながら離れていって、他の人の輪に入っていた。

僕は、スタッフ的には舞台監督の第四助手になっていた。今回の笠野さんが作成した装置は、舞台中央に張り物で囲んだ家の中が出来て、その両脇に、タワーのような四角い塔が建つ。その二つの塔の上手に立つ方が、一面は壁がなくて、くり抜かれた中が演技スペースとなる。「別の一室での会話」というシーンで使うのだ。だから、シーンによっては壁が前になって「抽象的な建物」だが、違うシーンでクルリと回すとくり抜かれた面が前に来て、「別の一部屋」に見える。そのタワーを最初の転換で回すのが、僕と水木さんの役割となった。回すと言っても、一辺が2mくらいで高さが3mくらいあるタワーで、その中に役者さんが二人入っているのだから、当然重量的にはかなり重くなるだろう。だが、男手二人くらいかかれば回るんじゃないかと誰もが思っていた。

僕も、体力には自信があるし、パートナーはベテランの水木さんだから、なんとかやる

さ、それよりも寿司屋の演技の方がヤバイよとたかをくくっていた。

この「くくったか」が、後でいろいろと巻き起こしたのだがー。

飲み屋の引き戸を開けて、賑わっている店内に入ると、むわっと人いきれがした。席は半分くらいが埋まっていて、お客はみんなサラリーマンやOLだ。店の奥で座ってたおばちゃん「いらっしやいませ。三名様？」と聞いてくるのを制して

「お客じゃないんですよ。あの、僕達、劇団いて座というお芝居のアマチュア劇団なんですけど、今度公演があります、このお店の前の所にポスター貼って頂けないかなと思いまして・・・」

と恐縮しながら言ってみる。反応はいろいろだ。「ああいいですよ」って簡単に言ってくれたり、「ちよつとなあ・・・」と渋い反応だったり、わざわざ店の前に出て「ここがいいかしらね」って一緒に考えてくれたり。

これは、いて座の「ポスター貼り周り」だ。公演1か月前くらいに、一度稽古の時間を潰して、劇団員総出で飲食店の固まった地域にチームで行く。そして宣伝用のB3のポスターをお店の中や外に貼ってくださいとお願ひするのだ。横浜駅西口や関内や伊勢佐木町、そして今僕が来ている野毛の飲み屋街に――。

「野毛は、年に一度、大道芸を開催しているくらいだから、芝居とかそういう事に関しては優しいんですよ。」って松岡さんが言っていた。野毛の大道芸は、商店街にピエロやパントマイムや手品なんかの人が集まって、路上で芸をする。お客さんはそれを見た後で投げ銭をする。僕も何度か見に来たことがあるが、いろんなものが見れて楽しいイベントだった。

「ああいつものね。いいわよ。どうぞお」と、この店のおばちゃんは言ってくれた。もう何年も続けてきたから、いつもOKな店からすると「またいて座の人がポスター貼りに来たのね」って感じた。ポスターを貼らせてくれたお店はリスト表に書いておいて、また次の公演のポスター貼りで声をかけさせてもらう。

正直言つて、営業中のお店に飛び込んで「ポスター貼らせてください」なんてお願いして回るなんて、恥ずかしい。それに断られた時のショックも大きい。俺は演劇をやりたくて入ったのに、なんでこんな事しなきゃならないんだよ？って最初は思った。

芝居は儲からない。つてのは事実だ。公演をやる時に、役者はお客を呼べる。「私出るのよ」「俺出るんだ」だから観に来てねって。ただそういうお客さんは、その知り合いが役者で出てない時、もしくはその役者が劇団を辞めたら、観には来なくなる。それだと結局役者の周囲の人しか客として来なくなってしまう。田丸さんは、そういう客ばかりでなくて、少しでも「いて座」という劇団が好きで観に来た」というお客さんを増やしたい。

「いて座ファン」が増えれば観客動員数も安定してきて、劇団運営の黒字に繋がる――と、こういう宣伝活動にも昔から時間と労力を割いているそう。こうやってポスターを貼れば、それを見た人が「ちよつと観てみるか」と観に来てくれてファンになってくれるかもしれないし、劇団員がチケットを知り合いに買ってあげてくれないか聞いてみる時でも「あ、この公演のポスター見たことある」って言われて売りやすくなるかもしれないのだ。そう言えば僕もいて座を知ったきっかけは、街中に貼ってあった公演ポスターで、僕の好きな作家の作品を上演するのだと知ったからだ。

ポスターを貼ってくれたお店には、「良かったらどうぞ」とお礼代わりに公演の招待券を渡している。ひよつとしたら、そんなものは僕達が出ていったらすぐゴミ箱に投げられてしまうかもしれない。だが、それを使って観てくれる可能性もゼロじゃないのだ。ポスターだって、貼ってあつてもどのくらいの人が目にとめるかは分からない。誰にも注目も

されないポスターだってきつとある。なんだか、ポスター貼りつて、とても地道だけど報われたかどうかがはっきり分からない作業だなあ。

リストにあつたお店を全部回つて、少しでも新規でお願いして貼ってくれたお店を開拓したらポスター貼りは終わる。終わったら、稽古場の田丸さんに、終わりましたと電話を入れて何件貼れたか報告すると、

「もうちよつと行けたんじゃないのか？ まあしようがない。お疲れさん。」という不満丸出しのねぎらいの言葉が返ってくる。

そしたら、飲みに行こう。となるのが芝居人の常みたいだ。

僕と松岡さんと美代子さんの三人は、「今度はお客として来ました」と言いながら、さつきポスターを貼ってくれたお店の暖簾をくぐつた。

「どうだい？ お寿司屋さんは？」

「あんまりうまくいかないっスねえ。」

「でも奥村君のお寿司屋さん、元気があつていいわよね？」

「そうっすか？」

「まあ元気だけだけどね」と言つて美代子さんはホホホと笑つた。

「芝居つてのは、難しいからなあ」松岡さんはしみじみと話す。

「どうやったら演技つてうまくなるんですか？」

「それは・・・ねえ・・・」

「ああ・・・」

僕の下直球な質問に、松岡さんも美代子さんも口を濁してしまつた。

「だいたい、田丸さんはあんなに言うけど、演技上手いんですか？」

松岡さんはハハハとちよつと前かがみになって、「ここだけの話ね、5年くらい前に田丸さんがちよい役で出演したことがあんのよ」

「アアあつたね、あれて「映画通りの天使」だったよね？」

「そうそれ。出てきて、「アレ？カバンが無いぞ！どこ行つたんだ？」とかつてセリフ一言しか無かつただけけど、お世辞にもうまいとは言えなかつたなあ」

「アレはひどかつたもん」思い出して苦い顔の美代子さん。

「でもさ、田丸さんが演出だから、演出がイイつて言つたらみんなダメだつて言えないんですよ。」

「じゃあ、演出する人がみんな演技うまいつてわけじゃあ・・・」

「無いんじゃないかなあ。映画監督さんだつてさ、役者出身で監督やる人もいるけど、有名な監督は演技なんかしたことないんじゃないの？」

確かにそうだ。黒澤明が名優だつたなんて話は聞いたこと無い。まあ黒澤監督が役者として撮影に来てしまつたら、その映画の監督は緊張しっぱなしだろうけど。

「そう言えば、奥村君はゆくゆくは演出の方になりたいんでしょ？」と美代子さんが聞いてきた。

「そうっすね。まあ、今はそんな事言つてられないですけど。」寿司屋が出来てないのに演出やりたいつてのは、こつ恥ずかしい。

「奥村君の演出した舞台か・・・見てみたいなあ。マアその頃には我々がおつ死ん

じゃつてるかもしれないから、早くなつてもらわないと困っちゃうけど。」

「そうよ。松ちゃんのお通夜と葬式は奥村君に演出してもらわないと。」

「オレもう死んでんの？ ひでえなあ」

フフフと美代子さんが笑つた。それにしても、こんなペンキ屋のおじさんとパートのおばちゃんと深夜の居酒屋の兄ちゃんが三人で飲んでる。普通の生活してたらきつと会つて飲みに行くなんて無かつた三人だ。たぶん、芝居に関わらなかつたら出会わなかつた人達なんだろう。

芝居をやつてゐるっていう共有感なのか、同じ事に嵌まつてしまった者同士の慰みなのか。

「ブわかあ。お前何やってんだ？」

笠野さんは、あつと言う間に僕の事をオマエ呼ばわりだ。今は釘を打つ方向を間違えたからと怒鳴ってきた。

「こつちから打っちゃうと、今度ソレが付くのには、釘が邪魔して繋がらねえじゃ

ねえか」

いや、ソレが付くなんてあんた言っただけでなかったらお？ そうなら釘打つ前に言っとけばいいじゃないかよ？ とにかくいちいち言葉が足りないおっさんだ。

昨日の土曜日は、僕が釘を打っていたが何回ナグリで叩いても全く釘が入っていかない。あれえ何で？と思わず大きな声で言ってしまうと、笠野さんが

「オマエそこは木の節だろ！」

「そこ節だよ」

「節だろ。何やってんだ！」

アレ？ 最初の声は笠野さんで、二番目は増井さん。じゃあ三番目は？と思っただけ顔を上げたら、座ってる田丸さんがタバコ持ってこつちを睨んでやがる。あまりにも目の前で怒られるものだから、イライラしてきたみたいだ。怒りは伝染するのか。言っておくけど、「こういう部分は木の節だから、釘打つても入らないぞ」なんて一度だって教えてもらった覚えはない。

そうやって怒鳴ってばかりいる笠野さんは、装置の作成作業中、座って指示を出して怒っているだけなのか？

答えは否だ。特に、装置の重要な部分を作成する時になると、増井さんにさえ任せないで、自分で黙々とノコやナグリで作業し始める。そんな感じで黙ってナグリを振り上げている笠野さんを見ると、店のマスターの加山さんを思い出した。

加山さんは、いろんな飲食店で修業してきて、あの店をやっている。店では焼き鳥や簡単な炒め物のメニューなんかは僕や自分の奥さんに任せる事はあるけど、刺身の盛り合わせの注文が入ると絶対に僕達には任せず、最初から最後まで自分で皿の上を作っていく。

「やっぱり、中トロとかカンパチを切ってみて、その色合いとか状態を見ないと盛り付けられないんだよ。それはよ、洋平ちゃんがどんなに料理の腕上げたとしても、俺のセンスっていうか感性だから伝えられないよな。」

「それは、あれですか？ 料理人のプライドっていうものですか？」

「うーん・・・そりゃあ、下手な物出したら、俺の腕が落ちたって言われるから、それもある。でもそれだけじゃないんだよな。こういうこうやってくれとかああやってくれとか、そういうのだけじゃあ伝わらないものがあるんだよなあ」

言葉だけでは簡単に伝えられない大事なものを持っている人を、職人と呼ぶのかもしれない。笠野さんも、人への説明は下手だしすぐ怒るしだけど、お客さんに見せる物を俺は作っているんだぞっていう「心意気」みたいなものは感じられた。

セリフとの闘いは続いていた。

稽古中に出番が来て、すし桶を持ってピンポン押して、お客さんに渡して去ると、

「お寿司屋さんさあ、もうその言い方じゃなくて、ちよつと違った言い方とか工夫して出来ないか考えてみな」と田丸さんに新たな課題を出された。

さあ困った。「お待たせしました」はどう読んでも「お待たせしました」だし、「ありがとうございました」は「ありがとうございました」だ。もうその音とリズムで読んでるので、違う言い方なんてどう転んでも出てこない。頭の中が「このセリフはこういう言い方しか無い」という概念で固まり、一つの言い方の音程やリズムやテンポしか出なくなってしまうていた。脚本には「このセリフはこの音程とテンポやリズムで喋ってください」と楽譜のように書かれてはいないのだが、まるでそれしか正解がないかのような思いこみだ。

「どう？ 寿司屋は順調なの？」と湯座さんがハイライトをくわえながら聞いてきた。

「順調じゃないツスよ。喋るたびにダメ出しばかりだから、たまにダメが出ないと

なにかおかしいぞ？って思うようになりましたヨ」

「あー、ダメ出し中毒だね」

「そんなのあるんですか？」

「無いよ。今考えた」

「なんだそりゃ・・・なんか、見ててアドバイスとかありますか？」

「エー？そんなの自分で考えなよ」

「冷たいっスねえ。トラップの時に一緒に苦しんだじゃないですかあ？」

「アタシ今回照明助手で、役者じゃないもん」

「ウワひでえ。後輩見捨てた」

「ほら、がんばって明かり当てるから、舞台上でがんばってネ」

「面白がつてますヨね？」

「そりゃそうだよ。苦しんでいる役者を見るのが、裏方の楽しみだもん」

優しい先輩ばかりだ。結局自分でどうにかするしかないのか。

そう言えば、川村さんも今回初舞台という事で、「主人公の娘婿の会社の後輩役」という、聞くだけであまり重要じゃないなど分かるような役をもらっていた。出るのは1シーンで5個ほどのセリフがあるのだが、やはり同じようにダメ出しをくらっている。こうなるともう底辺のライバル意識が芽生えてきて、いつからか、川村さんと僕のシーンでどちらがダメ出しが多かったのかを数えるようになっていた。

川村さんの出演シーンをみていると心の中で

「あれ？今の「僕もう時間なんで帰らせて頂きます」ってのは力み過ぎじゃないの？

何で止めないの？田丸さん聞いてた？・・・あー、そうこうしているうちに「僕本

当に帰りますので」って言いだしちゃったじゃんか。ヤバイヤバイ、もうシーンが

終わっちゃう。ノーダメ出しで帰らせていいの？・・・オ、止めた？と思ったら女

の子のセリフの方かよ！ ほらほらほら、あの歩き方でいいの田丸さん？見てる？

・・・あー目つぶってるのか・・・」

そんなことしてる暇があったら、セリフの言い方考えろって感がある。

こんな不毛な行為を脳内でしていながらも、セリフをもらった同じ初舞台って事で、川

村さんとは同レベル意識みたいなものが働いてあれこれと話すようになっていった。

ある日、川村さんが「あのさー」と、こんなことを言い出した。

「俺と奥村ってさ、ちょっとしか出ないわけじゃん。チョイ役。そのちよつとの出番

で失敗したら、アイツ失敗したぞって、それしかお客さんに残んない？」

なるほど言われてみると確かにそうだ。

「セリフとか出番たくさんあるとさ、一個のセリフ失敗してもまた次で挽回できる可

能性もあるわけじゃん。でも出番少ないと、セリフ覚えるの少なくて確かに楽なん

だけど、そのセリフ失敗するものすごくデカくない？・・・そう考えるとき、映

画とか舞台とかで脇役ばかりで何十年もやってる役者って、実は一番スゴイ役者な

んじゃないの？とかオレ思ったよ。」

そうか・・・僕も映画を観るときは、ついつい監督や主役やらの名前で面白そうか判断し

てしまう。でも地味にちよつとの役で出演している役者を特に気にしてはいなかった。

役者＝主役やスターが一番スゴイ。って単純に考えていたけど、実は目立たなくても演

技力がスゴイ人がたくさんいたし、そういう人が映画やテレビや演劇の世界を支えた部分

ってのは、僕が思っていたよりも大きいかもしれない。

ラスト、「群衆の中で親友を肩車する船井さん」というシーンとなるのだが、その後ろの壇上に、それまでの登場人物が横に並んで「群衆」として声を出したり「家族」として船井さんに声をかけたりする。

僕は「山野井正二、ばんざーいばんざーい」と群衆として大声を出す役だ。

ここはなんとか脇役として爪痕を残さない！と意気込んだ僕は考えた。そして、この

シーンで群衆としてパントマイムで動き続けてみることにした。

船井さんがセリフを言ってる時も、一人だけ「群衆」として大声を出す動きをしたり、出征する兵隊さんに大きく手を振ったりしてみただ。

センターにいる船井さんと動く僕との二元演技となる。「これはすごい事考え付いたな。オレって天才か？」とまで思っていた。

稽古中に黙ってその動きをやり出したのだが、特に田丸さんは何も言わずに流している。ああこれはもう「奥村面白い事考えたな」くらいは思ってるぞ、と調子に乗ってそのシーンの稽古の時は常にその動きをしていた。

そうして、本番一週間前の総稽古を迎えた。

どの役者も本番と同じ衣装を着て、稽古場にも少し緊張した空気が流れる。

総稽古は、本当に稽古としてのラスト。であると同時に、この稽古場で「きれいな口紅」の稽古をする最後の日。だ。もうここでこの白衣を着て、寿司屋のセリフを言う事は無いんだな。そう考えると既に寂しさを感じたりしてしまう。「トラップワイフ」の時に吉田さんが言っていた寂しさを、ちよつとだけ分かった気がした。

朝から田丸さんが気になる部分をいつものように稽古して、夕方からダメ出し無しの一発通し総稽古が始まる。まあセリフがスムーズに流れない場面がちよつとあるくらいで、特に何も起きない。もうよつほどの事・・・例えば役者が意識失って倒れるとか、そういう事が起きない限り、止められないからだ。

そしてラスト・・・僕はいつものように、群衆としてパントマイムの動きをしていた。いつものように。ただいつもの稽古と違っていたのは、田丸さんが目を開けて覗いていたことだ。

総稽古が終わると、みんなが田丸さんと舞台監督に直面して丸くなる。

「総稽古お疲れ様です。まあちよつとがっかりした部分もあるけどよ・・・」田丸さんが話し始めた。「もう稽古出来ないから、後は本番に向けて風邪とかひかないように注意して・・・」と話し終えそうな雰囲気になりそうな時に「あそうだ」と何かを想いついた田丸さんは突然僕の方に目を向けて

「寿司屋さん。あんた、ラストのあの動き、あれダメだよ。動かないでじっとしてて」

「え？ 動いちやダメなんですか？」

「そう。あそこで寿司屋が動いてたら、こっちのセリフが死んじゃうから」

「・・・エー？あれだけ稽古でやってたのに、いまさら？」

でも他のみんなも笑いながら「やつぱりな」って空気になっている。ウツソ？？そんならもつと早くやめさせろよ・・・

どうしても納得出来ない。と言うか、悔しきの方が勝っていた僕は、稽古の後で田丸さんの所に行つて「ダメなんですか？」と、自分の動きを見せた方が観ているお客さんがイメージが膨らむとか船井さんと僕で二つの表現が出来るとかそれっぽい事を言つて説明してみた。

が、ダメなものばダメ。

意外だったのは、田丸さんが「奥村！何で分からないんだバカ！」と頭ごなしに怒鳴つたりせずに、「自分としては、この場面は船井さんのセリフを聞かせたいのだからその動きは必要ない。あなたなりにいろいろ考えたのは分かる」と演出としての考えや思いを、僕みたいな若造に穏やかな口調で伝えたことだった。

金曜日の朝からの劇場での仕込みは、前回の「トラップワイフ」以上にみんなが殺氣立った。

笠野さんが指示を出して、それを増井さんと松岡さんがさらに男達に指示を出す。

だが、増井さん松岡さんが何かの作業で手いっぱいになってしまうと、指示が滞ってしまい、なかなか作業が進まない。それに今回は通常の張物の建て込みだけでなく、上手下手にタワーが立ったり、ラストで群衆として出演者が乗る為の横の長さが3m高さ1m程の台が3個あるのだ。作り込む量が多い。

いつも温和な感じの松岡さんも目が吊り上がって声を出している。

「おい。ここ誰か手が空いているヤツ、ついてくれー」

「吉田君どこ行つた？おい、よっちゃーん。」

「釘箱どこだつたっけ？」

照明班も忙しそうだ。場面展開が多いという事は、その分照明で作るシーンを増やさないといけない。同じアマチュア劇団の「劇団苺座」の照明部のベテランである金川さんが手伝いとしてきているのだが、怒鳴っている。

「これはこの大きさいいのか？ 照明チーフ！」

金川さんは、もじやもじや頭で背が低くて、挨拶しても「どうも」しか言わないおとなしそうなおっさんだが、照明の事になると途端に厳しくなり、照明のチーフは怒鳴られっぱなしな事もしばしば。それを見ながら、「照明じゃなくて良かったなあ」と張物をおさえながら考えていたら「何ボーっとしてんだよ？ ちゃんとおさえろ！」と今度は増井さんに怒られた。

それにしても・・・男の人数が少ないわけではないのだ。十人以上の男の団員がワラワラという。ただ、装置の事を全て把握して、釘を打ったり位置を決めて固定したり作り定める人材が少ない。その為にちよつと難しい所の作業になると、増井さんや松岡さんが自らやらなくてはならなくて、周りの男の団員はただ見守るしかできなくなっている。

「増井！ 早くやらないとリハーサル出来なくなるぞ！」としびれを切らしたように田丸さんが客席から大声を出してきた。それに増井さんが近寄っていつて説明している。という事はまた作業が止まる。

時計に目をやった。夜の6時。リハーサル開始予定時間まであと1時間しかない。劇場は夜10時に出ていかないといけないので、あまり時間を遅らすことも出来ない。

「転換稽古、出来無さそうだね。」

川村さんが思わずと言った感じでポツリと呟いた。そうだ。予定では、この時間から転換面の稽古を1時間やつての7時にリハ開始だったけど、もう転換の稽古は無しでそのままリハに行くしかなさそうだ。

「リハ、間に合うのかねえ」と、もう一度川村さんが呟いた。

結局、装置の細かい部分の作業はまた明日に回す、という事で、誰もがバタバタしながらリハーサルが始まった。

衣装の白衣を着た僕は、その上から黒い長袖Tシャツを着た。1景の終わり部分の、タワーを回す場面転換をする為だ。

舞台袖で水木さんと待機していると、1景の最後のセリフを船井さんが言っただけで舞台上が暗くなった。よし！ と水木さんと二人でタワーに取り付き、回す・・・はずだが、回ら

ない。役者二人が入っただけだ。幕間の音楽が終わりそうなのを察して、僕たちは明かりが入って明るくなった。が、タワーは半分までしか回っていないし、僕たちは明かりの中でマヌケにタワーにしがみついたままだ。

「なんだ？ どうしたんだよ？」舞台袖にいた増井さんが舞台に出てきた。

「いや、全然回りませんよこれ。全然ダメです。」と僕は一生懸命に弁解した。

「本当、二人で力入れても回らないですねこれ」と、水木さんは冷静だ。

増井さんは、口を真一文字に結んで考えるような表情をしていたがやがて「ちよつと今のこの時に、舞台袖にいて手が空いてる奴いるか？」と皆に聞いた。

「私、手が空いてます」と舞台監督第三助手の男の団員が言った。入団したのは僕よりちよつと先輩なのだが、あまり稽古に來なかつた人だ。

「じゃあよ、明日の本番、あんたここについて水木と奥村とコレ回すのに入ってくれ。なら回した所から、リハ続けるから」

みんなでせーのとタワーを回して、そこからまたリハを再開していった。

伊勢佐木町のまっすぐ伸びたメインストリート。それと並行に伸びている裏通りには、風俗店が固まっているエリアや、隠れた名店的な居酒屋や、何の店だかよく分からない店があり、どっちかと言うと猥雑で暗い感じの裏通りの雰囲気は僕は好きだ。

劇場でのリハースルが終わったその日の夜も、裏通りをプラプラと歩いて帰っていた。例によって朝まで焼き鳥店で働いていたの劇場での仕込みやリハースルだったので、眠気と疲労困憊の身体を引きづって、ピンクのネオンを眺めながら歩いていった。

「オウあんちゃん。あんちゃん！「鳥よし」のあんちゃん！」

アレ？と振り向いたら、ウオ！と声が出そうになる。店に時々来ている、頬に傷のある兄貴分とジャージのヤクザだ。

「ああどうもっス」と慌てて頭を下げた。

「なんだい？仕事の前に遊びに來たのか？」と兄貴分はへへっと笑った。

そうか、このへんはピンクエリアなんだ。「いやそうじゃないんです。今日はちよつと店休んでて、これから家に帰るトコなんです」なぜか急いで弁解した。

「そうか。遊んできゃあいいのに。」

「いや、金も無いですし。」
「マア遊びたくなつたら言いなヨ。いい店紹介してやるから。また焼き鳥食いに行くからな。」

はい、ありがとうございます。と頭をペコリと下げると、頬傷はじゃあな、とジャージを背後に連れて僕とは逆の方へ去っていった。

僕の中に「仕事モード」と「芝居モード」がある。一種の切り替えスイッチみたいなものだ。歩いている時は「芝居モード」だったけど、突然お客さんに会って「仕事モード」になるうとして、なんだか粟食つたみたいだ。

ああそうか。店の客といつ会ってもおかしくないんだな・・・ひよつとしたら、いて座の公演をたまたま観たことがある客もいるかもしれない。マ、可能性はゼロに近いけど・・・でも僕の演技を観たお客があつた時に、僕はいつもの焼き鳥屋のあんちゃんを出来るのかなあ・・・

ヤクザ二人が消えていったピンクネオンの路地を眺めながら、そんな事をぼんやりと考えていた。

翌日の土曜日。いよいよ「きれいな口紅」の本番初日だ。

朝にみんなで集合して、朝ミーティングする。前回の「トランプワイフ」の時よりも、役者も裏方も緊張感が濃い感じがする。やっぱり転換が多くてスムーズに進むのか不安があるからだろうか。

「奥村あ、最初の転換よろしくな」と水木さんが声をかけてきた。

「いえ、よろしくお願ひします」
「昨日は回らなくて困っちゃったよな。でもさ、今日は三人いるから大丈夫だと思うよ。」

のんびりした口調でそう言われると、そうですか、としか返せなくなる。
「奥村はお寿司屋さんもあるんだもんな。両方で大変だと思うけど、頑張つてな」

昨日の今日であまりにも緊迫感のない会話に、だいじょうぶかなあと不安が一瞬頭をよぎった。

客入れの時間となり、少しずつお客さんが座席を埋めていく。いて座では土曜日の午後二時と夜七時。そして日曜日の午後二時に公演するが、お客さんの入りとしては、土曜日と日曜日の昼の回の方が夜の回よりもよく入るみたいだ。

これは、夜の回だと芝居が終わるのが夜九時すぎとか長い芝居だと9時半とかになってしまうので、その後で一緒に来た人達で店に入って食事なんか行くのには遅くなってしまふ。昼の回なら夕方4時とかに終わり、その後で今日観た芝居の感想なんかゆっくり喋りながら食事なんか出来るからじゃないか、と僕は考えている。

この時も、お客さんは300人近くが詰めかけていた。場面転換でも寿司屋の演技でもこれはミスするわけはいかない。僕は衣装を着たまま、軽く両頬をペチペチと叩いて気合を入れた。

ふうふうふう。

2ベルが会場に響き、舞台前面の緞帳がゆっくりと上に上がっていく。
オープニングの音楽が流れると、船井さんが出てきて「私は・・・」と最初のセリフを

吐き出した。

この瞬間、澄んだような緊張から、芝居が流れ出していく。その流れは、誰にも止められない。

舞台袖には、僕と水木さんと第三助手が、緊張した表情でスタンバイしていた。

もうすぐ一幕の終わりとなり、タワーを回す転換となる。舞台は初老の船井さんが出ていた場面から、戦時中若き船井さんが慕っていた男性が、戦争の赤紙が着た事を船井さんと親友の女性に伝える場面となるのだ。

「でも私は時々思い出すの。昭和19年の秋。あの人があだし達に別れを告げに来た、あの日を。」

昭和初期を思い出させるレトロな音楽が流れだし、明かりがゆっくりと暗くなっていた。今だ！ 飛び出してタワーの一面に掴まり、回していく・・・はずだった。

が、おかしい。回らない。びくともしない。昨日よりも重くなっている。一人増えてるはずなのになんでだ？とひよっと第三助手の方に目をやると、彼は僕に向かって力を入れて回っていた。つまり、僕と水木さんが左に回っていたのに、彼は必死に右に向かって回っていたのだ。

一瞬、昔見たチャップリンの映画にこんな場面があったっけ？と記憶の画面が蘇った。何かを回すチャップリンと相棒。だがお互いで逆の方向に回っていて動かない。あきらめた相棒が手を離すとチャップリンが勢いでぐるぐる回転する。じゃあ僕は山高帽とステッキか？そんなことはない。すぐに小声で「逆！ぎやく！」と第三助手に言うと、気づいた彼は慌てて方向を変えて力を入れた為、今度はグルリン！とすごいスピードでタワーが回転した。ところで、ゆったりと明かりが戻っていった。おお間に合った！
と思ったのも束の間だ。

明かりがついてセリフが聞こえはじめたが、僕はまだタワーの背面にいた。

僕は、舞台上に取り残されてしまったのだ。勢いよく回りすぎたタワーが斜めになってしまい、それをまっすぐに修正して舞台袖に戻るのが遅れ、舞台は既に明るくなってしまった。タワーの背後に隠れた僕の前の壁の中では、戦地に行く男が女性に今生の別れのセリフを伝えている。舞台袖からは、水木さんと第三助手が心配そうにこっちを見てい

だが誰も助けられない。

さあどうする？ つつてもこの次の場面でオレ出番なんだよな・・・こんな悲しいセリフやり取りやつてる後ろで人が出て行ったら、お客さん絶対気づくし、あれさつきあそこから出ていったヤツが寿司の出前持ってきたな。じゃああそこの裏が寿司屋か？なんて思うかもしれない・・・この後すぐ暗く・・・ならない。明るいまんまだ。これで寿司屋出なかつたら・・・前代未聞だよな役者出てきませんなんて。いやどうするよコレ・・・

「武運を、お祈りしています。きつと生きて帰ってきてください」と、取り残された僕へむけたかのような女性のセリフが出て、タワー内を照らしていた明かりが消えた。

これで場面は、また舞台中央の家の家の中に移っていく。と言う事は、お客さんの視線は舞台の真ん中に向けられるのだ。

あ、ひよつとしてチャンス？

舞台袖を見た。その距離およそ3m。行けるか？行けるのか？でも行くしかない！ほとんど助走も出来ずにエイヤッとジャンプした。なんと袖の黒い幕の間に届いたが、勢いあまつたまま床の上にとどつと四つん這いで着地した。

「奥村、大丈夫か？」と水木さん。

大丈夫なわけではない。膝を打って痛いし、まだドキドキしている。だが早く反対側の下手に行つて寿司屋のスタンバイしないと、とすぐに立ち上がり、舞台裏の通路に向かった。通路を歩きながら上に来た黒い長袖Tシャツを脱いで、白衣になりながら、頭の中で反芻する。——幸いにもお客さんには一人も気づかれず・・・できてないよな。芝居中に舞台のはじつこから男が一人飛び出したんだ。下手したら「あれ？あそこからジャンプした男つてのは、そういう演出なのか？」って思われてるのかもな・・・どう考えたって俺の失敗みたいだよなあ。あーもう・・・ヤケだこうなりやー。

下手袖に行つて寿司屋の桶を持つと、舞台上では僕が出るきつかけのセリフを言い始めている。深呼吸して呼吸を整えて「もうどうにでもなれ」とぼそつと呟いてから舞台に出た。

それが出た時？ うーん・・・何も考えていなかったかなあ。無の境地？ そういうと「剣の達人」みたいでカッコいいけど、そんな高尚なものでもない。要するに、ただのやけくそな気持ちで舞台に出て行ったかな。

でも、こうは考えた。

寿司屋の出前持ちだつて、歌くらい歌うだろう。つて。

♪ まりこのへーやへー ♪ でんわをかーけてー

♪ おーとこーとー ♪ あそんでるーしばい

♪ つづけてきたけれーどー

鼻歌を歌いながら登場して四つ角を曲がった。そのままピンポン押して、「お待ちせしましたー」とセリフを言う。自分でもびつくりするくらい力が抜けた。というか、頑張ろうとかいい演技しようとか一切考えていなく、ただ投げやりな心境だったただけだ。

寿司を渡してお金を受け取り、お釣りを渡す。ありがとうございましたー。と言ひ、

♪ あーくーじよおになあーるなら ♪ つきよはおよしよ

♪ すなおになりすぎーるー

とサビを歌いながら去つていった。

なぜ中島みゆき？ の中でなぜ「悪女」？ かはよく分からない。つい口をついて出たのが中島みゆきの「悪女」だったただけだ。でも、ミスチルでもサザンでも安室奈美恵でもないし、だからと言って美空ひばりともちよつと違う。

あの時のあそこは、中島みゆき。で「悪女」しかなかった。

その後の出番は二回あったが、全て鼻歌混じりで登場していった。最初だけ歌つて後は歌わないのもおかしいかなと思つての事だ。いつも同じ歌にしてはあれかなと、三度目は

中島みゆきの「アザミ嬢のララバイ」にした。まああまり変わってなかったみたいだけど。

いよいよラストシーンだ。僕が田丸さんに「群集としてのマイムの動き」を止められたシーンである。

「あーあー。ここで動いたらいけないんだ」と思いながら台の上に立った。何もしないで立っただけなんて、こんな役者が楽しんでつまらないものを見せていいのかなあ？とちよつと不貞腐れた気分で立っていた。舞台中央にいる船井さんのセリフに呼応するように、他の役者がセリフを喋っていく。それを聞きながら自分のセリフの番が来るまでじつと立って待っている―それだけなのに、両膝が震え出した。なんでだ？あがっているわけではない。でも小刻みなガクガクが止まらない。止まれ止まれと念ずるが止まらない。こんなんだったら動いている方が全然楽だ。アレ？ひよつとして「見られながら体を静止させる」って、とっても難しいものなのか？お客として見ていると、じつとしている役者よりもバタバタ動き回っている役者に目が行くし、動く方が大変だって思っていた。でも、観られながら動かない方が難しい。そうかまた自分は間違った見方をしていたのかもかもしれない。テレビや映画で動かないベテラン俳優を「体が動かなくなったら役者はお終いだ」なんて分かった風にちよつとなめて観ていたぞ。ああこんな舞台上で足が震えている僕みたいなのが偉そうな事を知ったかぶりで考えていて、皆さん本当にごめんなさい！と一人で脳内で懺悔する寿司屋を立たせたまま、セリフは進んでいった。

そして、船井さんが親友の女性を肩車する感動的なシーン。

直近の稽古での船井さんの肩車成功率は、10回に8回くらいの成功率になっていたけど、少し焦ったり重心が傾くとよろけてしまう。なので背後で眺めている自分達キャストも「なんとか成功しますように」と無言で祈っていた。

「じゃあアタシに乗って！肩車してあげる」

「ええ？でも、いいの？」

「いいわよ。早くして！じゃないとあの人もう行っちゃうでしょう？もう会えないかもしれないのよ。」

「分かったわ。じゃあ、ごめんね乗るね！」

船井さんの肩を跨いだ女性の身体がゆっくりと・・・持ち上がった。成功だ。

その時、客席は・・・一瞬にポカンとした静寂のあとで、どつと笑いが起こった。

エ？なんでだ？自分が好きな人だけど、親友がその人と別れの挨拶できる為に肩車してあげるっていう感動的な場面なのに―。だけど、みんな笑っている。

でもお客さんの目から言うと、小柄なおばさんと若い女の子が舞台上にいて、そのおばさんが自分より大きい女の子の子を肩車すると持ち上げてしまったのだ。少し驚いて、そのあまり見たことない姿に思わず笑ってしまうのだろう。僕達は船井さんが稽古の期間に、この肩車を成功させるためにスクワットを頑張って、失敗してきた姿を見ている。けどお客さんには、この「若い女を持ち上げる小柄なおばさん」という絵が全て。それまでの長い期間の過程なんて知ったこっちゃないのだ。

「善一郎さん！あ、こつちに手を振ってくれたわ」

「そう、良かったわね・・・あの人は、ふさ子ちゃんには口紅をくれて、アタシにはおまんじゅうだった・・・」

ド！つとセリフがまたお客さんの笑いを増長させる。これじゃモテなかったおばさんの愚痴だよ。でももうこの空気は変わらない。

「善一郎さん！　ずっと言えませんでしたけど、私、あなたをお慕いしていました！」

と船井さんが叫んで、清らかな音楽が流れ緞帳が下がる―。

お客さんは、マドンナに振られた寅さん映画を観た後みたいになっている。

こうして、「きれいな口紅」の初回の公演は、なんだか喜劇的な雰囲気が終わってしま

った。

4

「アタシさあ、「アレ？こんな歌作ったかなあ」って思っちゃったよ。そしたら、ようちゃんが歌ってるんだもん。びっくりしちゃったヨ！」

美月さんことみっちゃんの、ピーチサワアのジョッキを持ち笑いながらの言葉が店内に響いた。今回、みっちゃんは音響の担当だったので、客席に作ったブースで機械を操作して音出しをしていたのだ。

ここは、劇場の近くの居酒屋の座敷席。初日の公演が無事に終わったので、とりあえずのお疲れさんという事で、若い劇団員達8人くらいで飲みに来た。

「でもさ、ようちゃん。何で「悪女」なの？」ときよとんとした目でみっちゃんが聞いてきた。みっちゃんはクリンとした瞳でショートカットで、微笑むといい笑顔をする女の子だ。僕とは同じ年なので、いろいろと話すうちにいつの間にか「ようちゃん」と呼ばれている。

「なんで？・・・それは・・・なんでかと言うと・・・」
みっちゃんは、うん？とまっすぐな眼差しでこっちを見てきた。

「センス？かなあ・・・」

「ばあかじやないのアンタ！何がセンス？十年早いわ！いや、二十年早いわ！」

隣にいた菊池さんが、太い腕で背中をバンバン叩きながら怒ってきた。のを見てみっちゃんはコロコロ笑う。

「でもあれだよ。最初の舞台転換の後でさ、寿司屋さんがタワーの後ろからジャンプで戻ってきたよね？」と川村さんがニヤニヤして告げた。

「しようがないっすよ。あのままだったら、寿司屋出てこなかったですよ」

「そうしたら、奥村どこ行った！って田丸さんが舞台のそでに来るトコだったよね」

「そんな事あったらそのまま外に逃げますよ。」

「じゃあ、寿司が届かないだろ？」

「そこはあれじゃないですか、残った役者さんが「お寿司届かないねえ」って言い続けてもらえれば」

そこからみんなの話は、寿司屋取り残しの他にも、細かい転換でミスがあった。舞台監督の増井さんは大丈夫か？今回は転換が多くて、舞台監督としてきちんと仕切れていないんじゃないか。という方向になっていった。

どうやら、何十年もやってるベテラン団員達と若手の団員達の間には、考え方とか思いとかに違いがあるみたいだ。今までのやり方を重視するベテランと、革新的な事もやってみたいし、自分達世代の発言も重要視してほしい若手と――。

僕は、正直な所よく分からなかった。確かにおっさん達に怒られるのはムカつく。でもそれに立ち向かえるだけの技術があるかと言われると、無い。まあどうせ自分は映画の世界に行くための腰かけ気分での劇団員だし、劇団ってこういう事もあるんだなあ。いろいろ大変だなあ。と思っていたら、ドスンと背中を叩かれた。何？とそっちを見たら湯座さんだ。赤い顔で血走った目つきだ。

「こら寿司屋あ。勝手に歌なんか歌うな」こりや面倒だ。

「エ？歌ってました・・・っけ」

「歌ってたるお？♪あーくーにょーになるなら。だっけ？」

「あくじよ。です。ちよっと音程も違いますよ」

「んなのどうでもいいんだヨ。この野郎。いいなあ、好き勝手やりやがって。アタシは

トラップの時一個も好きな事出来なかったんだぞ」

「なんかスイマセン」

「そうだよオマエ。湯座ちゃんの言う通りだよ。オマエがアドリブなんて百年早いってさっき言ってたんだよ」と面倒な展開でさらに面倒な菊池さんが入ってきた。

「あれ？百年でしたっけ？十年じゃなかったでした？」

「うるさいね。とにかく生意気なんだよ。奥村のくせに」

「それジャイアンが「のび太のくせに」って言うのと一緒じゃないスカ」

「オマエなんかのび太のレベルでも無いんだ。のび太の鼻くそみたいなヤツなんだよ！」

「ヒヤハハハ！のび太の鼻くそっていいね」と湯座さんがツボにはまったみたいだ。

先輩と話すといろいろ勉強になる。今日は、新しい悪口言葉を教えてもらった。

翌日の朝、目が覚めて、普段と変わらずに食パンで朝食を食べた。

歯を磨いて、顔をアワアワにして髭を剃っている時、鏡に映った自分の顔を眺めつつ、「あ。こうやって寿司屋の兄ちゃんを演じる人として髭を剃るのは最後なんだ」と気が付いた。そう考えると、今さっき歯を磨いたのもパンを齧ったのも寿司屋として最後だった。何も考えずにやってたけど、もうちょつとしみじみと歯を磨けば良かったと少し後悔してしまった。

「きれいな口紅」の千秋楽。

朝に集合し、全員でミーティングした後、皆は個々に散る。そんな中、客席に座った笠野さんと増井さんが深刻そうな表情で話をしていた。何の話かはよく分からないが、笠野さんが一方的に喋って、増井さんが聞き役に徹している。正直言って、増井さんがそんな聞き役になるなんて初めて見た。

「笠野さん、増井さんから見ると装置の師匠みたいなものだからねえ。」との声で、ふつと横を見ると、松岡さんが心配そうに見ていた。

しばらくして話し終えると、増井さんは今度は田丸さんと何やらボソボソと客席で話しはじめ、それが終わると皆に号令をかけて、場面転換の稽古をやると言い出した。

楽日の最後の一回の上演の為に、場面転換の稽古をやるって事がどれだけ前例のない事か分からなかったけど、ベテランの船井さんや駒込さんがそれを聞いた時に、ちよつと不満そうな表情をしていたのは見ていて分かった。昨日の二度の上演で小さな失敗のあった場面転換の稽古は、時間ギリギリまで続き、それを見守る増井さんは険しい目つきをしていた。

そして、最後の上演の幕が開く。

この、演劇っていう表現方法は、どういうものなのだろうかと未だに分からない。

僕は、時にはタワーを回したり、時には寿司屋として演じたり、一人の群衆として演じたりしている。でも、「主演女優の船井さんの為」とは思わないし、「演出の田丸さんの為」とも思っていない。だからって、それが自己表現かと言われても、そんなに自分が表現できているとも思えない。

ただ、スムーズにタワーが回って転換出来た時、悪女を歌いながら寿司桶を持って袖に帰って行く時、なんだかとても気持ちがいい時がある。それは、「うまくお客を騙せることが出来た」と思う瞬間なのかもしれない。そう考えると、「演劇やってます」ってなんか文化的な感じがするけど、やってる事は詐欺師とあまり変わらないかもな、と思ったりもした。

楽日の最後の寿司屋の登場。鼻歌は、「雨上がりの夜空に」でやってみた。♪どうしたんだ。へいはいはい。バッテリーはビンビンだぜー。ピンポーン。お待たせしましたぁー。という感じで。エ？セリフ？あー、そういえば喋ったなあ。どうだったんだろう？

うまく演じられたのか、お客さんの心に残る寿司屋になったのかは分からない。セリフが飛んだり気持ちが悪かったりといった分かりやすいミスは無かったけど、失敗しないから成功かというところというわけでも無いんだなというのはおぼろげながら分かってきた。

最後の場面の一つ前。現代での船井さんが、娘夫婦とケンカして家を出て、駅に行った時への簡単な転換だった。

娘の家での口論してそこを飛び出すシーンから暗くなり、船井さんがピンスポットで照らされて・・・立っていた。しかし家出の荷物が無い。舞台袖では、小道具担当がせつぱつまった顔で「どうしよう！荷物置き忘れちゃった！」と大きなボストンバッグを持って慌てている。小道具がボストンバッグを所定の場所に置いておき、それを暗くなつて袖に下がった船井さんが持つて出ていくはずだったが、その場所にバッグを置き忘れたみたいだ。でも荷物が無いと「ただ家を出ただけ」になって、ラストで田舎に帰るといふ決意を喋るがそれが伝わらない。小道具の訴えを聞く増井さんも奥歯を噛み締めている。

その時、バツとバッグに手が伸びてそれを奪った。見ると、駒込さんだ。駒込さんは手に持ったバッグを、船井さんの長女役の前に出して

「恵理子、出る時にこれ持っていけ。で、「お母さん荷物忘れたでしょ？」って渡してからセリフ言え」

と早口で指示を出す。確かにこれから駅に長女が来るので、そこで荷物を渡せばなんとか辻褃は合う。長女役の人も頷いて、自分の出た時にさりげなくセリフを足してバッグを渡し、なんとかお客に悟られないくらいにはごまかした。

でもしかし・・・そこまで、開演時間ギリギリまで稽古をした転換場面は、稽古の効果かうまくいっていたのに、稽古しなかった駅の場面で、ただバッグを置いておくだけなのにミスが起きてしまうなんて・・・舞台って本当に生ものだ。だからどんなトラブルが起きるか全く分からないんだという事を僕は実感した。

ラストシーンを終えて、カーテンコール。役者が横一直線に並ぶ。僕は前回のトラップワイフもそうだったが、今回も脇役なので舞台のはじっこで頭を下げる。ペコリと下げた頭の上をウィーンと微かなモーター音をたてて緞帳が降りてくるのを感じると、ああもうこの寿司屋になる事も無いんだなあという寂しさがわいてきた。前に吉田さんが言っていた寂しさってこういう事なのかなあ。

そこから楽屋に戻り、G.パンとシヤツに着替えて舞台装置のバラシの作業に入ったけど、なんだか前回のトラップワイフよりも「早くやろう」という気持ちが強かった。なんだかゆっくり作業をやっていると寂しさで気持ち満タンになって、ヘタしたら涙が出るかもしれないなかったから、そんな気分を紛らわせるために少しでも早くバラバラにしてしまおうと思ったのかもしれない。

ふと見ると、笠野さんも寂しそうな表情で倒される装置を眺めていた・・・はずもなくて、ボールを持つて作業している水木さんに、段取りが悪いだの何やってんだだのと文句を吐き続けている。文句言うんなら自分もやりやあいじゃんか。このおっさんにそんな繊細な感傷は無いのかと考えていたら、こっちを見た笠野さんと目が合ってしまった。「前なにぼーっとしてんだよ！」と距離があるのに文句言われてしまった。本当に食えないおっさんだ。

グラスがカチャカチャとぶつかり合う音が稽古場のあちこちで鳴っている。

打ち上げが始まった。すぐに席を立て移動する人がいたり、早くも差し入れでもらった日本酒の封を破りにかかるヤツまでいる。でもこの終わった雰囲気や感じは、まるで前回のトラップワイフの時の打ち上げの再現ビデオみたいだ。

それでもやっぱり打ち上げはいいもんだ。

賑やかな中、僕は増井さんがトラックを置いて戻って来るのを待っていた。来たなら、リハでタワ―が回らなかつた事や本番にタワ―の裏に取り残された事を「本当に大変だったんすよ」とビール飲みながら話そうと思っていたのだ。

が、来ない。道路が混んでいるのか、それとも仕事の方で急な用事が出来たのか。増井さんはオシボリとかナプキンとか紙製品を卸す問屋の仕事なので、急にお客さんに呼び出

される事もよくある。

「増井さん、遅いっスね。仕事ですかね」と何気なく松岡さんに呟いてみた。

「たぶん、来ないと思うぞ。増井さんさ、金曜日のリハの後、吐いちゃったらしいからな」

え？何で？体調悪いのか？と思った僕の表情を読んで、松岡さんは言葉が続けた。

「ほら。リハで転換がめちやくちやだったでしょ？ だからあれで公演がうまく出来るのかってプレッシャーでだと思っよ。ましてや今回は笠野さんが装置やって、いろいろ増井さんに言ってきたしね」

「でも、吐いたとかそんな事全然言ってますんでしたけど」

「公演中に舞台監督がプレッシャーで吐いたなんてみんな知ったら不安になっちゃうからね。私には言ってたよ。「まっちゃん俺昨日吐いちゃったよ」って」

じゃあ・・・そんな状態で公演を仕切っていたのか。

「ほら。役者さんは稽古場で何度も稽古出来るけど、裏方って現場行っただけからが勝負なんですよ。劇場行っただけの変更もあるし、何が起るかわからないしね」

今回の公演がまさにそうだ。田丸さんはもちろんだけど、笠野さんや増井さんや小道具担当や役者達なんかの様々な想いが交錯して、転換も多く様々なトラブルが発生した。それを時間も無い中で処理していかないとイケなかったのだ。

でも、お客さんは、主演の船井さんや役者達の顔を見て名前を知ったけど、今回の舞台監督の名前すら覚えようとしてもしないだろう。役者達は観に来た人に花束をもらえるけど、舞台監督に「良い舞台を監督してくれてありがとう」ってバラの花1本でも持ってきてくれるお客さんなんかいない。

今この打ち上げでも、船井さんの周りにはお疲れ様ですって何人も劇団員がグラスを持って近寄ってきて主演女優をねぎらっている。でも増井さんは疲れ切って一人で家に帰ってしまった。この公演で一番キツイ思いをしたのに、同じ劇団員ですらも誰もそれを知らない。たぶん、田丸さんでさえも知らない。

こんな事であっていいのか？ こんな事があったのに、なんでみんな平気な顔で酒を飲めるんだ？

「裏方ってね、大人の遊びなのよ」

という美代子さんの言葉が蘇って来た。

僕は、その言葉の意味が、ちよびっとだけ分かったような気がした。

その日の打ち上げは、なんだか役者で出演した人たちとお疲れさんですと一緒に飲む気分になれず、稽古場の隅でビールを持ちながら床に座り込み、ずっと松岡さんと語り合っていた。今回の場面転換の事や増井さんの事や芝居の裏方の事を話していたのだが、ビールを空にしてだんだん酔っ払ってきた松岡さんがペンキの塗り方や色の合わせ方について熱く語り始め、僕はハイハイと頷きながらメンドクせえなあと全く聞いていないような感じで「きれいな口紅」の打ち上げは終わっていった。

終章

パチツと目が覚めた。

どこだここは？　ぐるぐると見まわして、本棚に並んでいる「パタリロ！」の文字が目
に飛び込んできた。

あ、俺の部屋だ。じゃあ時間は？と壁を見上げる。時計の針は、四時を通り過ぎたば
りだ。

闇は・・・深い。これなら早朝の四時だ。

エ？　バイト？

急いで動こうとした時、松岡さんの人懐っこい笑顔が脳裏に浮かびあがった。

そうだった。「きれいな口紅」の打ち上げに出て、帰ってきたのは深夜の一時すぎだっ
たんだ。それから軽くシャワーを浴びて、ベッドに入ったのが二時くらい。だからまだ二
時間くらいしか眠っていない事になる。

いて座の公演の打ち上げは稽古場で行われるから、飲み屋みたいにも「そろそろ閉店です
ので」と追い出される心配がない。なので、打ち上げる日の翌日も仕事の休みを取って
おいて、一晩中飲み明かす人も何人かいる。

僕は、翌日の月曜日の夜は店が定休日なので、稽古場に泊まって一晩中飲み明かす事も
可能だ。でも、気持ち良くてちょうどいいなと思うタイミングである事にしている。

なんでそうするかは分からないけど、そうしている。

ベッドの上で天井を見つめながら、この四日間の事を思い出してみた。

舞台装置の仕込みが間に合わなくて、リハーサルでタワーが回らなくて、本番中に舞台
上に取り残された。歌を歌いながら出て行って、舞台上で足が震えて、増井さんが吐いて
いたって事を知って、松岡さんと飲みながら話をした。

全部、本当に起こった事なんだろうか？　ひよっとして、実は全部夢でしたって夢オチ
なんじゃないか。とぼんやりと考えたりしていた。

それだけ、テンションがあがって、楽しかったからそう思うのかもしれない。

再び、目を瞑る。

明日の夜からは、また夜行性の人間達の中に入って、焼き鳥焼いたり生ビールを注いだ
りしないといけない。

それが、^{いまわ}現か――。

ただ、今はこの心地よい気分のまま、もう少し酔わせてください。

ゆらゆらと揺れているように、少し微笑みながら、漆黒の帳の中へと、ゆっくりと墮ち
ていった――。